

全国植樹祭を振り返る ～邇摩高校生も貢献しました～

約1ヶ月前の5月30日に全国植樹祭が、去年開催予定を1年延期し、島根県で開催されました。大田市の三瓶山が式典会場ということもあり、本校の生徒6名が式典補助員として参加しました。また、式典用の花のプランター制作に農業系列の生徒が関わらせていただきました。それらの関わりをもとに、全国植樹祭を振り返ってみます。

式典の補助員としての役割は、来賓の方の誘導が主なものでしたが、本番までに4回の講習会やリハーサルに参加しました。講習会では、お辞儀の仕方や誘導する際の所作など日常では経験することのない礼儀作法に苦戦しながらも、熱心に取り組みました。生徒たちは、天皇陛下を間近にお目にかかる機会ととても楽しみにしていましたが、新型コロナウイルスの影響で規模は縮小され、式典は史上初めて天皇皇后両陛下が出席される東京の赤坂御用地と三瓶の会場を生中継で結び開かれました。しかし、生徒たちは、与えられた任務を見事にやりきり、すばらしい式典に貢献してくれました。参加した生徒は、『すごく緊張したけど貴重な経験になった』と答えてくれました。式典の様子は、テレビで中継されたので、それを見て本校の生徒たちの素晴らしい所作に校長としてとても誇らしく思いました。

また、式典会場を彩るプランター制作は、県下の農業を学ぶ5つの高校が担当し、本校は100個のプランターを制作しました。花の種類も各校にあらかじめ分担されており、本校は青色のペチュニアを担当しました。制作にあたっては、2月初旬に播種するところからスタートし、3月から4月にかけて3号ポットから5号ポットへの2回の鉢上げを行い、5月中旬に3鉢ずつプランターに移植し完成させていきました。その間の作業、栽培管理は生徒たちが主体的に行ってくれました。

その作業を進めている最中に大田さつか郵便局から、『全国植樹祭用に育てた花に余裕があれば、大田市内の13の郵便局にプランターを飾りたいのですが』と問い合わせがありました。担当教員に早速その話をすると是非とも協力したいといただき、合計39個のプランターを郵便局に提供させていただきました。さらに、地元郵便局である仁万郵便局と温泉津郵便局にもプランターを贈呈することにしました。地元郵便局には生徒たちが直接出向き、局長さんにお渡ししました。その際の生徒の感想に『皆さんが「きれい」と笑顔で言ってくださり、「本当に育ててよかった」と感じることができました。ただ栽培管理を行い、栽培方法や技術を学ぶだけでなく、このような形で地域の方とコミュニケーションを図ることは達成感ややりがいを感じることができて本当に良かったです。』とありました。

今回の全国植樹祭のテーマは、「木でつなごう人と森との緑の輪」で、天皇陛下の式典での御挨拶にも「人と森との関りによる緑の循環が島根の地から全国へそして未来に向けて継承されていくことを願います」とありました。本校の農業系列では、林業への理解を深めようと、昨年度から県立農林大学校や林業事業体の見学を実施しています。そして今年の1月には、温泉津町内の間伐現場を見学に出かけました。その様子は、5月25日に発売された「山陰経済ウイークリー」にも取り上げていただきました。島根県は県土の約8割をしめる豊かな森があります。そして、県内の木材生産量はこの10年右肩上がりの傾向にあり、島根の林業は成長産業だそうです。そうした中、本校から昨年度農林大学校の林業科へ3名の生徒が入学しました。

地元開催となった「全国植樹祭」に本校の生徒たちが成長の場あるいは、成長のきっかけづくりとして関わらせていただけたことにとっても感謝しています。

